

11/30 12:55

(公開不可)

取扱注意

暫定版

情報共有

非管理化

(2枚)

NDA制限 ← プレス対応T

プラント状況(本店レク)議事メモ

日時：平成23年11月30日(水) 11:00～11:20

場所：東京電力本館3階大会議室

先方：記者約15名(カメラ3台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配布資料：

- 福島第一原子力発電所2号機原子炉格納容器ガス管理システムの気体のサンプリング結果について
- 福島第一原子力発電所における高濃度の放射性物質を含むたまり水の貯蔵及び処理の状況について(第23報)
- 福島第一原子力発電所1～3号機原子炉圧力容器(RPV)内への窒素封入ルートについて

[REDACTED]よりプラント状況・配布資料に関して説明。

質疑：

Q. 本日、福島県が福島第一原子力発電所の5, 6号機と福島第二原子力発電所の各号機の廃炉を申し入れるという話があるが、東京電力としてどう受け止めているか。また、今後どう対応するのか。

A. 現在、被害設備の点検や復旧作業、設備の安全確保を進めている状況であり、当社として廃炉について決定しているという事は無い。

Q. 地元の福島県が廃炉の判断をしたのはして重いと思うが、廃炉についての申し入れが合った場合どうするか。

A. 県議会でも決議されているが、今後地元の方々とご相談させていただく。

Q. 福島第一原子力発電所5, 6号機と福島第二原子力発電所各号機の廃炉の判断はいつするのか。

A. 現在、被害設備の点検や復旧作業、設備の安全確保を進めている状況であり、廃炉については今のところ未定。

Q. 今回申し入れがあったことで、賠償や地元雇用について何か影響はあるのか。

A. 今回の申し入れとは関係ないと考えている。賠償は引き続き着実に進めていくとともに、雇用についても様々なご意見を頂戴しているので、地元の方々と相談していきたい。

Q. 水処理装置の使用済ベッセルの保管容量が残り100本を切っているが、いつ頃まで保管可能か。

A. 現状保管できる本数が398本であるが、将来700本まで保管できるように工事を進

めている。

Q. 以前、除染装置から出る廃スラッジの上澄みを取って減容するという計画があったと思うが、検討状況はどうなっているか。

A. 廃スラッジの成分と上澄みを分離できている状況ではあるが、具体的な時期については未定。現在、廃スラッジ用のタンクを設置しており、スケジュールを合わせて行う予定。

Q. 使用済ベッセルや廃スラッジから発生する水素の量や濃度は、想定と比べてどのような状況か。

A. 廃スラッジ用のタンクには換気装置が付いており、水の放射性分解によって発生する水素については、排気できている。使用済ベッセルについては水を抜いた状態で保管しており、またベントラインがあるので圧力が上昇すると自動的に排出される。

Q. 1～3号機の原子炉圧力容器への窒素封入は、本日から工事を始めて本日中に窒素封入できるのか。

A. その通り。1, 2号機については昨日から工事を始めている。本日準備が整えば、2号機から封入を開始する予定。

Q. 原子炉圧力容器の容量に対して、窒素が十分に行き渡るのはいつ頃か。

A. 数時間程度で行き渡ると考えている。2号機は6時間程度で $5\text{ m}^3/\text{h}$ で封入を開始し、パラメータを監視しながら $10\text{ m}^3/\text{h}$ まで上げる予定。1, 3号機については水素濃度を測定できないため、 $5\text{ m}^3/\text{h}$ で封入を開始した後、4日間ほどホールドする事を考えている。しかし、2号機のガス管理システムにおける水素濃度の状況次第で対応を変更する可能性はある。水素濃度が異常に上昇すると、原子炉圧力容器側での対応を減らしたり、格納容器側の封入量を増やす等して格納容器側へ流出する水素の量を抑える等の対応を考えている。

Q. 原子炉への注水量を絞っていたが、元に戻す予定はあるのか。

A. 水素ガス濃度が落ち着くまでは、注水量を調整する予定は無い。今のところ、温度をこのまま維持して、2号機の水素濃度を観察する。水素濃度を見極めた後、注水量を増やし、冷却を再開する。

以上

取扱議事  
会議資料

情報共有 (7枚 非管理用)  
KIAA リクエストレス対応手引

東京電力株式会社

暫定版

12/17:10

## プラント状況(本店会見)議事メモ

日時：平成23年11月30日(水) 18:00～19:50

場所：東京電力本館3階大会議室

先方：記者約25名(カメラ3台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

### 配布資料：

- ・福島第一原子力発電所の状況
- ・福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果について(第二百五十報)
- ・福島第一原子力発電所付近における海水中の放射性物質の核種分析の結果について(第二百四十三報)
- ・福島第一原子力発電所取水口付近で採取した海水中に含まれる放射性物質の核種分析の結果について(11月29日採取分)
- ・福島第一原子力発電所タービン建屋付近のサブドレンからの放射性物質の検出について
- ・集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果
- ・福島第一原子力発電所構内における土壤中の放射性物質の核種分析の結果について(統報41)
- ・緊急時作業者の被ばく線量の評価状況等について
- ・福島第二原子力発電所における緊急事態応急対策の実施状況に係る報告の補正について
- ・東京電力福島第一原子力発電所1～3号機の炉心損傷状況の推定について
- ・【技術WS資料1-1】事故後のプラント挙動について
- ・【技術WS資料1-3】実機条件を反映したJAEAモデルの改良と評価結果について
- ・【技術WS資料1-4】燃料状態把握のための核種アプローチについて
- ・【技術WS資料1-5】MAAP解析とコアコンクリート反応の検討について

■から「東京電力福島第一原子力発電所1～3号機の炉心損傷状況の推定に関する技術ワークショップ」における当社説明資料の説明。

### 質疑：

Q. MAAPによる解析について、損傷燃料が格納容器底部のコンクリートを侵食しているという結果を公表したのは今回が初めてだと思うが、各号機の炉心溶融の経緯についての解析は5月に公表した見解と変わりはないという理解でよいか。

A. その通り。なおコンクリートコア反応についてもMAAPのコードを使用して解析したものである。

Q. 1号機の圧力容器底部が破損し燃料が格納容器に落下しているとのことだが、圧力容器の破損状態は、従来の説明通り、中性子計測管等から漏れているという程度なのか、それとも圧力容器の底に大きな穴が開いたという状態を考えているのか。

A. 圧力容器底部の損傷の状態については、解析結果からは把握できておらず、実際に見てみないと分からぬ状況である。炉心全体が溶けて圧力容器底部に燃料が落ちてみると分かぬ状況である。約 15 cm ある圧力容器の底が丸ごと抜けるというより、下していると考えているが、約 15 cm ある圧力容器の底が丸ごと抜けるというより、溶接箇所や制御棒案内管を通じて燃料が流れ出た可能性が高いのではないかと考えているが、圧力容器の穴の状態について結論は出でていない。

Q. 圧力容器の底の状態はMAAP の解析では分からぬということか。

A. その通り。

Q. 1号機格納容器の水位は格納容器下部から 30~40 cm 程度あり、損傷燃料は水に浸っているとの説明があつたが、報告書にはその点の記載はあるのか。

A. 報告書の 8 ページに記載がある。構造的に水が最低限溜まる高さであるベント管下端は OP 6600 mm であり、ペデスタルの床面が OP 6180 mm であることから、30~40 cm 程度水位があるものと考えている。

Q. 2、3号機の燃料は圧力容器の下部に落ちているものの、格納容器には落ちていないことだが、ワークショップでの説明では、「燃料が 60% 程度格納容器に落ちている」との仮定しても冷却には問題がないとの説明があつた。燃料の場所について見解に食い違いがあるように思われるが、その点の整合性はどう考えればよいのか。

A. パラメータ等を評価し保守的な評価をすると、2号機が 57%、3号機が 63% 程度燃料が損傷して圧力容器から落ちていると評価している。ただし燃料がその程度落ちていても格納容器内で冷えていると考えている。事故当時、電源が喪失下していたとしても格納容器内で冷えていると考えている。注水した水がメカシールを通じて再循環ポンプのメカシールが切れたことにより、注水した水がメカシールを通じてドレンピットに流入していたと考えている。炉心損傷は 2号機で 3月 14 日、3号機で 3月 13 日に始まるが、その時期には格納容器ペデスタルの底部にはある程度の水が溜まっていたと考えられ、2、3号機については損傷燃料が水の中に落ちて固まったと考えている。

Q. 2、3号機の燃料は現状どこにあると考えているのか。

A. 2、3号機の燃料は、現実的には圧力容器にほぼ留まっていると考えている。1号機については、燃料が格納容器の底を突き破っているかどうかが重要な点である。燃料が圧力容器から全量落ちたと保守的な仮定をしても、格納容器底部のコンクリートを約 70 cm 侵食するに留まるとの結果となつた。現実的には 1号機の燃料は 1~2割程度は圧力容器側に残っていると考えている。

Q. 3号機の格納容器の水位はどの程度の深さと考えているのか。

A. OP で 12m~13m 程度と考えており、実際の水位としてはフラスコの床面から約 7 m の深さがあると思われる。2号機の水位については不明であり、1号機と 3号機の間にあるのではないかと考えている。

Q. RCW熱交換機で冷却する補機にはどのようなものがあるのか。

A. 原子炉に使用するポンプ類の冷却設備として、使用済燃料プール、原子炉冷却材  
浄化系、再循環ポンプのモータ等がある。

Q. 各号機において、燃料がどの程度格納容器に落ちていると考えているのか。

A. 解析上では1号機は100%、2号機は57%、3号機は63%程度格納容器に落下したとしている。

Q. 格納容器まで燃料が流れ落ちた量という理解でよいか。

A. 圧力容器底部から制御棒案内管や駆動装置、中性子計測管が密集しており、それらの箇所に引っかかっているということも考えられ、基本的には、圧力容器から流れ出たと考えている。

Q. 1号機は炉心全体が溶けて圧力容器に落下しており、2、3号機についても炉心の半分以上が溶けて格納容器に落ちているという理解でよいか。

A. 解析上はその通り。ただし現実的には、1号機は注水量を変化させると、圧力容器の温度が変化することから、燃料がある程度は圧力容器の中にあると考えられる。

Q. 格納容器底部のコンクリートの最も深い箇所は深さ2.6mという認識でよいか。

A. その通り。具体的には原子炉の重さを支えるペデスタルの床面に幅1.45m、深さ1.2mのピットがあり、そのピットが格納容器の底の鋼鉄部分に最も近い箇所になる。そのピットに溶けた燃料が直接落ちたと仮定しても、コンクリートの侵食の深さは、約65cmと考えており、格納容器の鋼鉄には届かないと考えている。

Q. 最も深くコンクリート侵食する可能性があり、コンクリートの厚さが少ない部分がサンプピットの部分という理解でよいか。

A. その通り。

Q. 燃料がサンプピットに落下し65cmコンクリートを侵食した場合、格納容器の鋼鉄までの距離が最も近い箇所で37cmという理解でよいか。

A. その通り。なお解析をどの程度厳しくするかによって結果は変化する。1箇所のサンプピットに全ての燃料が流入したと仮定すると侵食の深さは最も深くなるが、現実的には燃料はほぼ均等に落ちてきていると考えている。

Q. 格納容器の鋼鉄部分まで37cmしか余裕がないことだが、格納容器の健全性和信頼性についてどう考えているか。

A. MAAAPが持っている計算コードの不確かさがあると考えている。今回は燃料が100%落ちていると仮定して解析をしているが、実際には圧力容器底部に損傷燃料が残っていることから、その点で保守性があると考えている。また格納容器に燃料が全量落下したとしても、ペデスタルに均等に広がるものと考えられ、サンプに固定して落下するとは考えずらいことから、その点にも保守性があるのではないか。37cmという距離についてどう考えるかについては、格納容器底部のコンクリートは強度部材でなく、この部分で物を支える箇所では無いことから、侵食の深さに

については特段問題のないものと考えている。

Q. 今回の解析では燃料が格納容器に落下した割合を保守的に評価したことだが、現実的にはどの程度の燃料が格納容器に落下していると考えているのか。

A. 現実的には、1号機では今回の評価と比較し1~2割程度少ない値ではないかと考えているが、今後データを蓄積したり、解析の精度を上げることで検証を進めていきたい。

Q. 1号機は、津波到達後燃料が溶融したことだが、1号機の燃料が他号機と比較し早い段階で溶けた原因は何か。

A. 津波の影響度合いは、各号機で少しずつ異なっている。1号機と比較し、2、3号機で炉心損傷まで時間的な余裕があるのは、原子炉隔離時冷却系や高圧注水系等の直流電源で動く設備が起動していたためである。1号機は電源装置が津波と同時に冠水し使用できなくなったことから高圧で原子炉に注水する設備が無くなつたことから2、3号機と比較し、炉心の溶融が早くなつたと考えている。

Q. 何故1号機のみ早い段階で電源装置が使用できなくなったのか。

A. 1号機の直流電源を設置しているバッテリー室が津波によって冠水したため。

Q. 当時ICはどのような状態だったのか。

A. 一時的な起動は確認できているが、それ以降は使用できない状態であった。事後にバッテリー室を確認したところIC用のバッテリーは冠水している状態であった。

Q. 溶融した燃料が、格納容器下部に均等に広がったとの説明があったが、その根拠は。

A. 燃料の一部が粒子化するから均等に広がり体積するのか。  
A. 2、3号機は、格納容器下部に水が溜まっている状態であったことから、燃料が水面に落下すると粒子化しやすいと考えており、コンクリートの侵食の深さは2号機で7~12cm、3号機で、13~20cm程度と考えている。1号機は格納容器の底に水がない状態であったことから、燃料が溶けた状態でペデスタルに到達していると考えている。燃料が格納容器内にほぼ均等に広がると、コンクリートの侵食は少なくなる。一方ピットに集中的に落下した場合は、コンクリートの侵食具合が大きくなる。

Q. 今回は格納容器の中心部に燃料が落下するという仮定をしているのか。

A. 今回はサンプルピットをめがけて燃料が落下していると仮定している。実際には制御棒案内管を損傷させ均一に落ちてくると考えている。

Q. 燃料の形状は各号機でどのようにになっていると考えているのか。

A. 1号機の燃料はドロドロした状態で格納容器に落下していると考えている。2、3号機は格納容器に水が張った状態で燃料が落下することから粒子化しているものと考えている。なお粒子化した状態のほうが発熱量は小さくなる。

Q. 現実的には2, 3号機は燃料が格納容器に落ちていないとの見解だが、本日開催されたワークショップで(財)エネルギー総合工学研究所がMAAPとは別の解析を実施しており、2, 3号機も燃料が格納容器にある程度落下しているとの見解を示しているが、東電の解析結果はどの程度確からしいと考えているのか。

A. 現在確認できているパラメータ、温度の指示値から、圧力容器内にある程度燃料が留まっているのではないかと考えているが、今後専門家のご意見を伺いながら精度を高めていきたいと考えている。今回のような評価を行った目的としては、今後中長期的な問題として廃炉について考えるにあたり、炉心に燃料がどの程度あるのかを把握し、燃料の取り出しにどのような技術開発が必要になるのかを検討するためである。

Q. 東電は今回の解析でMAAPという解析方法を使っているが、JNESがMAAPで解析を行った場合、今回東電が公表した解析結果と同じものになるのか。

A. 同じ解析コードを使っても、設定条件や入力条件が異なれば結果は異なる。以前保安院がメルコアで解析を行っているが、当社が推測した炉心損傷の時間より数時間程早い結果が出ている。

Q. 今回の東電の解析を今後保安院が評価することはあるのか。

A. 保安院には当社の評価について説明はしているが、報告書を提出し、評価を頂くことは考えていない。今後は本日のワーキングのような議論を積み重ね、評価の精度を高めていきたい。

Q. 1号機の燃料が100%落ちたと仮定しているが、燃料が落ちたとするといつ頃の時期に燃料が落ちたと考えているのか。

A. 事故発災当時の3/11、12に落下したものと考えている。

Q. 今回のコアコンクリート反応について、どの程度保守的に解析したのか。また今回以上に保守的な見方をする必要があると考えているのか。

A. 落下燃料はまずドレンサンプピットに入ってくるという保守的な想定をしている。仮にドレンサンプピットに選択的に落ちてきたとすると解析結果も変わっていくと思われる。

Q. 今回のコアコンクリート反応の解析は最も厳しい評価をしているのか。

A. 基本的にはMAAPの解析コードであるDECOMPを用いている。

Q. コンクリートが損傷することで、汚染水が流出するなどの懸念はあるのか。

A. 40年以上経過したコンクリートなので、おそらくクラックなどはあると思われる。仮に損傷燃料が格納容器底部の鋼鉄を通過しても、基礎マットまで貫通するにはかなりの時間を要すると考えている。

Q. 汚染水が地下に漏れる可能性はゼロではないということか。

A. 格納容器底部の鋼鉄が損傷していない限り外部に漏れることはないとと思われる。仮に格納容器的部の鋼鉄が損傷していたとしても地下水まで流出するのは難しいと思う。

Q. コンクリートの経年劣化について、今までに何か指摘されてことはあったのか。  
A. 高経年評価の中でも、コンクリートに関しては評価上問題ない。

Q. 炉心損傷状況の解析方法は MAAP 以外にもメルコアなどがあるかと思うが、なぜ MAAP での解析を選択したのか。  
A. MAAP はアメリカ電力中央研究所 EPRI が開発しており、アメリカの電力会社においても広く一般的に使用されている解析コードなので MAAP にて解析を行った。

Q. 原子力安全・保安院のメルコアでの結果では、炉心損傷の時間が MAAP よりも早い結果が出ているのはなぜか。  
A. 解析コードを変更することで結果は変わってくる。原子力安全・保安院のメルコアでの結果を比較すると、確かにメルコアの方が炉心損傷の時間は早く出ている。

Q. 今後 MAAP とは違う手法を用いて解析する予定はあるのか。  
A. 別の解析コードに変更することは検討していないが、入力条件などを変更することで、別のアプローチ手法などの比較検討を行いたいとは思っている。

Q. 1号機についてはほとんどの燃料がペデスタルへ落下しているという保守的な評価だが、そのような状況は物理的にあり得るのか。  
A. 物理的には非常に難しいと思う。今回の解析条件に圧力容器下部の構造材などは考慮しておらず、実際には構造材などに引っかかっているケースも考えられる。

Q. 今回の炉心損傷の分析結果では、損傷燃料が格納容器を通過し、基礎マットにまで達しているかは評価していないのか。  
A. 今回の評価の最大のポイントは格納容器内に損傷燃料が到達しているかどうかということ。仮に燃料のほとんどがペデスタルに落下し、保守的に考えたとしても、コンクリートの浸食は約 70 cm 程度と考えている。

Q. 1号機の圧力容器内の水位について、ペデスタル底部が OP6180、ベント管が OP6700 なので、水位はその間の 40~50 cm 程度しかないということか。  
A. 圧力容器への窒素封入自体に影響がないので、ベント管の高さまで水位はないと考えている。水位についてはおおよそではあるが約 30~40 cm 程度と思われる。

Q. 格納容器から水が漏れているのは確実ということだが、ベント管に入った水は圧力抑制室に落ちていくのか。また、水蒸気のリーク箇所は圧力抑制室なのか。  
A. その通り。6月に1階床貫通部分から水蒸気が確認されていたが、10月には炉内が冷却されていることから水蒸気が確認されていない。

Q. 格納容器内に落ちた燃料の割合について、保守的に考えて、1号機が 100%、2号機 57%、3号機が 63% とのことだが、実際にはどの程度と考えているのか。  
A. 2、3号機についてはほぼ落下していないと思うが、正確な割合は不明。1号機については 1~2 割程度は圧力容器内に残っているとは考えているが、正確な割合については不明。

Q. 今回の解析結果が廃炉へのロードマップにどのような影響を与えると考えているのか。

A. 炉内については安定した冷却が出来ており、冷温停止に大きな変更はなく、水素ガスの管理も引き続き行っていく。影響があるとすれば、今後10~20年先に行われる損傷燃料の取り出し作業についてである。圧力容器から落下してしまった損傷燃料を取り出す作業については今後課題になっていくと思われる。

Q. 圧力容器の上部以外からの取り出し方法も検討するのか。

A. 損傷燃料が圧力容器から落下していると、真上から取り出すのは難しいと思うので、損傷燃料の取り出しのルートについては今後検討することになる。具体的な取り出し方法などは決まっていない。

Q. 1号機の原子炉補機冷却系配管の損傷について、これまでに高線量などの作業の弊害となるような事象はあったのか。

A. 1号機における作業において直接的に支障になったことはない。熱交換機エリアで一部1000mSvを超える高線量エリアが存在したが、作業を予定しているエリアではないため、特に影響はなかった。

Q. 機器ドレンサンプルピットは燃料の損傷などを見据えてペデスタル底部に設置されたのか。

A. 事故などで高温になった原子炉を冷却した際に発生する熱水を冷却するために設置した配管であり、損傷燃料の落下を想定して設置されたものではない。

Q. 原子炉補機冷却系は今回の事故でも冷却に寄与したのか。また熱交換機内にどの程度の水量があったのか。

A. 解析評価上は原子炉補機冷却系からピットに溜まった水については考慮していない。原子炉補機冷却系配管付近の線量が高いため、1号機の損傷燃料が機器ドレンサンプルピットに落下したのはほぼ間違いないと思われる。

Q. 1号機の損傷燃料は約1~2割程度が圧力容器内に残っている可能性があるとのことだが、2号機と3号機についてはどうか。

A. 解析としては1号機が100%、2号機57%、3号機が63%と考えている。ただ、パラメータの温度などを見ると1号機では約1~2割、2号機と3号機については解析結果よりも落下の割合は少ないと考えているが、実際に炉内を確認できていないので不確かな部分はある。

Q. JNESのサムソンを使用した解析では、1号機で2m未満のコアコンクリートの浸食があるとのことだが、どのように考えているか。

A. サムソンの結果は把握していないが、解析コードが違うと、仮定なども大きく異なるため、比較するにあたっては議論が必要に思われる。

以上

取扱説明書  
公開あり

情報共有 (2枚外管理メモ)  
NDAヨリエアレス対応手順

東京電力株式会社

暫定版

1/17:00

プラント状況(本店会見)議事メモ

日時：平成23年11月30日(水) 19:50～20:10

場所：東京電力本館3階大会議室

先方：記者約25名(カメラ3台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配布資料：

- 福島第一原子力発電所の状況
- 福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果について(第二百五十報)
- 福島第一原子力発電所付近における海水中の放射性物質の核種分析の結果について(第二百四十三報)
- 福島第一原子力発電所取水口付近で採取した海水中に含まれる放射性物質の核種分析の結果について(11月29日採取分)
- 福島第一原子力発電所タービン建屋付近のサブドレンからの放射性物質の検出について
- 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果
- 福島第一原子力発電所構内における土壤中の放射性物質の核種分析の結果について(続報41)
- 緊急時作業者の被ばく線量の評価状況等について
- 福島第二原子力発電所における緊急事態応急対策の実施状況に係る報告の補正について

■から「東京電力福島第一原子力発電所1～3号機の炉心損傷状況の推定に関する技術ワークショップ」における当社説明資料の説明および質疑を実施後、継続して上記資料について ■から説明および質疑を実施。

質疑：

Q. 本日から運用開始した圧力容器への窒素封入について、2号機の封入量が安定しない理由は。

A. 現在調査を行っており、具体的な原因究明は出来ていない。確認出来次第、窒素封入を再開したいと考えている。

Q. 本日のワークショップで公表した炉心損傷状況などから1、3号機の水素濃度はどの程度と考えているのか。

A. 2、3号機は炉心損傷状況が似ているので、炉内の水素ガスの濃度は2号機と似ていると考えている。1号機は損傷燃料が圧力容器内にあまり残っていないとなると、圧力容器内に溜まっている水素ガス量もあまり多くないのではないかと考えている。従って、ヘッドスプレイラインから窒素を入れているが、大きな変化は出ないかもしれないと考えている。

Q. 本日、福島県知事から福島第二原子力発電所の廃炉に関する表明があったが、東電としてのコメントをいただきたい。

A. 福島県から廃炉の要請を承っているが、現在、福島第一原子力発電所1～4号機の事故からの復旧、および福島第一原子力発電所5、6号機、福島第二原子力発電所の安全系機能等の点検および安全確保に取り組んでいる。福島第一原子力発電所5、6号機および福島第二原子力発電所の今後については何か決めているわけではなく、まずは安全確保第一に進めたい。廃炉については地元の皆さまと今後、相談してまいりたいと考えている。

Q. 窒素封入することで、1、3号機内の水素ガスはRPV、DWのリーク部から建屋から経て外部へ放出されると言うことで良いか。

A. ルートとしてはその通り。原子炉の配管貫通部やシール部から窒素と水素が混ざつて漏れ出て、建屋側から抜けると考えている。

Q. 水素ガスが爆発を起こすような可燃限界濃度を超えるリスクはあるのか。  
A. 格納容器そのものの水素濃度は高くないので、窒素と一緒に水素が漏れても可燃限界濃度に達することはないと考えている。

以上